

群馬県伊勢崎市の工業

重 田 節 子

はじめに

群馬県の南東部に位置する伊勢崎市は、明治以来銘仙の産地として群馬県の工業の発達にも大きな役割を果たしてきた。第2次世界大戦までは、工業のうちほとんどが織物を中心とする繊維工業で占められ単一機業都市としての性格を強く持っていた。戦後もいち早く復興したが、近年においては電気機器、一般機械機器などの工業の発達がめざましい。本研究は、伝統的な銘仙産地としての伊勢崎市の工業の変化を見ながら、近年大きく変化して発展してきているのはいかなる要因によるものであるかを考察するものである。

1. 織物産地の形成

伊勢崎市は、北に赤城山を負い南に利根川を控え、山地と平地の交界地域にあり、土地利用が樹木農業としての桑園化にあてられ、県内でも屈指の養蚕地であった。農家は良質の繭は売りに出し、クズ繭を自宅でひいて紡ぎ自給用に織っていた。明治期になってからは、これ等の技術を生かして商品化が本格的に行なわれるようになる。これは、伊勢崎が城下町のため明治維新という変動期をのりきる活路として、織物の生産を始めるようになったためである。桐生は、江戸時代から西陣とならび称される絹織物の産地であり、伊勢崎の織物は、桐生を核として周縁的な発展をする。伊勢崎の織物は、明治期から現在に至るまで素材面では種々変化はあるが小巾織物といって着尺が中心となっている。戦前までは銘仙を一色としている。

明治19年に伊勢崎太織会社が設置され、染色講習所などが設けられ、品質の向上、技術者の養成などが行なわれた。種々、器具等も改善、発明がなされた。織機も足踏み機であるいざり機は、大正11年には高能率である手織機の高機に完全にとってかわられる。力織機による工場組織も大正後期にはいつてから実現されるようになる。生産は増大の一途をたどり表Iで示すように昭和5年には450万反を越え最盛期を迎える。伊勢崎の場合発展の性格は、高機へのいざり機からの移行も同じ機業地としての桐生、足利などと比較するとおそく発展の促進はおくれた。力織機についても、桐生が農村に根強い賃織り業を残しながらも手織機を凌駕するのは昭和2年である。しかし、伊勢崎では手織機がずっと優位にたつのである。伊勢崎では、着尺を中心とする小巾織物は、きわめて手工的な絣織物の製織技術が伝統的に継承されており、これに反して桐生では、大量生産のできる服地用広巾織物が中心であったことによる。伊勢崎の織物は、ほとんどが内地向織物であった。集散地は、東京、大阪、京都、名古屋がほとんど占めている。明治期、大正期、昭和の初期は大阪、京都の占める割合が大きかったが、年々東京、名古屋にゆずっている。

戦時中は、政府の統制や企業整備等によって生産設備は大巾に縮小された。このため生産高は、昭和5年の最盛時には4,558,593反であつたのが、昭和18年には224,996反、昭和20年には117,615反と減退する。

2. 戦後の工業

戦後は国民の衣料不足に機を得、伊勢崎市の繊維工業はいちはやく復興した。この復興は、足利の繊維工業が内容的にも変化させトリコットなども導入して総合的な繊維産地として出発したのに対し、伊勢崎では依然として賃機に基をおく複雑な生産工程をもつ小巾着尺中心であつた。このようなうちに復興するが、戦後、朝鮮動乱による特需景気のと昭和28年～29年にかけてデフレ政策がとられたり、織物の目まぐるしい変遷のうちにも永年の歴史と伝統を持つ絹の特徴が消費者層の嗜好に投じ、逐年生

産が伸びて昭和30年～31年には、年産2,661,297反、2,917,034反となり第2次黄金時代を迎える。しかし、昭和33年～34年には、いわゆる戦後の不況によって小巾織物は100万反をわるまで減少した。この減産対策として小巾織物は、銘仙依存から多角生産への移行に目ざし、素材面からの改善に着手しウール着尺の転換に成功した。ウール着尺は全国的に好評で迎えられ、昭和36年には124万反、昭和40年度の190万反まで増産の一途をたどった。しかし、昭和40年度の生産額をピークにして昭和41年以降漸減の推移を示してゆく。この様相は、ウール着尺が一応国内に行わたり、しかも伊勢崎の特殊性が他産地の模倣などから平準化されて特色を生かし得なかったことによる。広巾織物、毛織物について見た場合も小巾織物と同じように、景気の動向のなかで一進一退の状態にある。

繊維以外の工業は、機械、金属工業などが戦前まで盛んであつたが、敗戦により大きな打撃を受けた。戦後は軍需工場の民需への転換、新設工場によって、新しく電気機器関係の企業が立ち直りを見せた。この他、戦時中中島飛行機株式会社であつた工場から出発した富士自動車工業株式会社を中心に、協力工場も漸時設立され、輸送用機器工業が立地し発展した。

表 I

伊勢崎市
小巾織物
生産高推移

資料
伊勢崎織物
組合

年 度	数 量 (反)
明治元年	60,200
5 年	91,200
10 年	140,400
15 年	141,586
20 年	218,456
25 年	465,040
30 年	760,236
35 年	869,622
40 年	1,047,340
大正元年	1,273,488
5 年	1,084,422
10 年	3,137,162
昭和元年	3,107,050
5 年	4,558,593
10 年	2,758,554
15 年	2,762,870
20 年	68,207
25 年	1,835,413
30 年	2,661,297
35 年	1,175,326
40 年	1,910,756
45 年	1,248,000
47 年	1,046,739

3. 産業構造の変化

繊維工業の現状に反して、機械や電気機器などの重工業の発達はめざましい。表2は繊維を中心とする軽工業と機械や電気機器などの重工業について事業所数、従業員数の推移を示したものである。事業所数では、昭和33年に軽工業が91.8%を占めていたが、昭和47年には51.8%となる。従業員数では、昭和33年に軽工業が50.9%を占め、昭和47年には33.2%といずれも軽工業から重工業へと比重の移行が見られる。事業所に関して昭和33年に91.8%を軽工業が示すのは繊維関係の事業所が多いためである。従業員数で昭和33年に重工業が49%を占めているのは、戦後出発した電気機器、輸送用機器の工場が比較的大規模であったことによる。製造品出荷額について見た場合も軽工業は、年々占める割合が少なくなっている。昭和47年現在の内訳は、重工業74.6%軽工業25.4%である。

表2 重工業軽工業別による事業所数、従業員数の推移

年 度	事 業 所 数					従 業 員 数				
	総 数	軽工業	割 合	重工業	割 合	総 数	軽工業	割 合	重工業	割 合
昭和 33年	1,932	(1581) 1,774	91.8%	158	8.2%	13,457	(5,460) 6,741	50.9%	6,716	49.1%
35年	2,040	(1,513) 1,785	87.5%	255	12.5%	16,956	(5,960) 7,975	47.1%	8,981	52.9%
42年	1,808	(1,082) 1,363	75.0%	443	25.0%	18,038	(5,003) 7,947	44.1%	10,091	55.9%
44年	1,598	(544) 924	57.4%	674	42.2%	20,926	(5,971) 6,695	32.0%	14,231	68.0%
47年	1,473	(457) 752	51.8%	721	48.5%	21,007	(3,414) 6,976	33.2%	14,031	66.8%

※()は繊維工業

資料 群馬県統計年鑑

以上のように繊維を中心とする軽工業が後退を余儀なくされ、一般機械や電気機器などの重工業が、経済の推進力としてその中核を負うようになった要因には次のことが考えられる。軽工業のウェイトの低下は繊維工業の占める割合が年々減少していることによる。繊維工業のウェイトの低下が軽工業のウェイトの低下の絶対的な要因としてあげられる。この他、軽工業のウェイトの低下には、相対的な要因として、重工業の発展があげられる。伊勢崎では、昭和32年に工場設置奨励条例が制定され、事業場を新設または、増設を行なう者に対し、便宜を供与したり、この条例の運営のため工場誘致対策委員会がおかれ、工場誘致が積極的にされたためである。このため重工業関係

の工業の発展が促進された。

繊維工業が後退している様相は、表 2 によってわかる。製造品出荷額について見た場合も、昭和 42 年には 24.7 ㉵を占めていたのが現在では 13.1 ㉵となっている。このように後退を余儀なくされているのは、伊勢崎の織物工業の持つ生産工程、流通過程の問題によるものと思われる。伊勢崎の繊維工業は、小巾織物が中心であり、この小巾織物は手工的絰織を基盤とし、高度の技術を必要とするため、複雑な分業体系を形成しており、生産そのものが分化、独立し企業化している。この企業化した各工程に工場を有しない機屋が賃加工を委託する形態をとり、染色技術にしても、絰機技術にしても個々の下職たちの職人的な修練や訓れに依存してきた面が強く技術的な進歩が少ない。機屋にしても糸から織物に仕上げる機能に依存しすぎて自己資本の蓄積や下職機構の育成に対しての心構え等にも問題があるように思われる。近年労働力も他企業へ吸収され、中高年層のみが機業の下職を担当する不自然な形で推移してきている。小巾織物は、ほとんどが先染織物であり、生産工程を複雑にし、大量生産が困難であるため、また、絶えず流行を追って変化する見込生産を行なっているため、多数の中小織物工場をつくり出している。このため不況に対しての力も弱く転業者も多い。流通過程は、仲介者として買継商が介在している。買継商は伊勢崎においては手数料が 4.8 ㉵と認められている。この買継制度は、生産者が一般に零細な経営規模で生産を行なっているため、資本力の強い東京、大阪の間屋を相手に直接取引をする必要もなく有利な点もある。しかし、返品、値崩れ、滞貨など不況の波もここから寄せ始めるそして、また、買継商は他産地と比較して当産地としての織物が質、量、価格等不利であれば直ちに他の産地のものの取扱いに転向するおそれがあるわけである。現在、構造改善事業で共販体制をとる共同事業センターが設立されたが、ここで取扱う織物の流通は 4 ㉵ということである。その他は今までのように買継商が行なっている。

伊勢崎市に工場設置奨励条例が制定され、積極的には工業誘致が行なわれている。これは、群馬県のみではないが、首都圏の一部を占め内陸工業地帯としてのすぐれた特性を持ち立地条件が有利なためである。伊勢崎市では昭和 33 年から昭和 45 年にかけて 94 企業が誘致された。群馬県としては 925 企業である。伊勢崎の構成比は 10 ㉵である。伊勢崎市では現在 2 つの工業団地が設立されている。1 つは、八斗島工業団地で伊勢崎市の南部で利根川に近いところに立地した。進出企業は 17 企業でそのほとんどが東京などの外資本によるものである。佐波伊勢崎工業団地は、伊勢崎市の東南部に位置し昭和 45 年から造成が着手された。現在、8 企業が決定している。8 企業すべてが外資本である。業種は様々であるが重工業関係の工業が多い。従業員数も比較的多い。

4. 工業の現況と性格

現在伊勢崎市の工業は、食料品、繊維、衣服、木材、家具、バルブ、紙、出版印刷、ゴム皮革、窯業土石、鉄鋼、非鉄鋼、金属製品、一般機械、輸送用機器といったように多種多様である。主な

工業については表3で示す通りである。

伊勢崎市の都市形成は江戸以降城下町として発展してきて、本町、西町などを中心に市場形態をとってきたが、明治大正期の織物の発展によって、殖蓮地区、茂呂地区、豊受地区などに織物工場が住宅と併設されて、混屯未分化のままで推移してきた。しかし、近年の誘致工場の立地や移転工場設置などのために次第に郊外地帯へ移る傾向が見られる。例としては、宮子地区や太田県道沿いの下諏訪周辺、旧市街地北方の波志江地区等に建設されている。

表 3

事業所	数	比	従業員	数	比	出荷額	数	比
総 数	1,473	100%	総 数	21,007	100%	総 数	9,596,321	100%
織 維	457	30.7	電 気	4,973	23.7	電 気	2,218,853	23.2
金 属	292	19.8	織 維	2,414	16.3	機 械	1,880,735	19.6
機 械	141	9.6	機 械	2,859	13.6	輸 送	1,309,279	13.7
電 気	115	7.8	輸 送	2,667	12.7	織 維	1,241,223	13.1
輸 送	78	5.3	金 属	2,090	10.0	金 属	705,330	7.4
衣服服	73	5.0	家 具	1,170	5.6	家 具	527,787	5.5
食 料	66	4.5	食料品	711	3.4	食料品	318,262	3.8
その他		17.3	その他		14.3	その他		13.7

資料・・・伊勢崎市工業統計

工業の性格としては、中小企業の多いことがあげられる。新しく誘致された工場や戦後大規模なうちに出発した工場は別として伊勢崎の場合中小企業が多い。規模別にみると1000人以上の工場は1500～999人が2300～499人が7、100～299人が21、50～99人が45、30～49人が59、10～29人が241、10～1人が699である。100人以上の工場29のうち繊維関係の工場数は3である。事業所数の多い繊維企業の場合ほとんどが小規模な工場である。繊維工業の他、金属や機械、電気機器、輸送用機器の工業なども、下請工場がたくさんあり中小企業数が多い。

伊勢崎市の製造品出荷額は、近年急速に伸びている。この伸びに比べて伊勢崎市の人口はあまり増加していない。これは、繊維関係の工業からの労働人口流出が行なわれるためであり、機業地としての影響がうかがわれる。この他労働人口への流出は農業の兼業化によるものが考えられる。昭和28年には専業農家が72.0%を占めていたのが昭和47年現在では18.5%になっている。兼

業も第一種兼業よりも第二種兼業の方が多い。

おわりに

伊勢崎市の工業は、明治期から第2次大戦前まで絹織物の小巾着尺を中心に栄え黄金時代が築かれた。戦後は衣料不足によっていちはやく復興し発展するようになるが、現在では、景気の動向に左右され生産高も減産し、繊維産業は伸び悩みの状態にある。織物産地としての色彩は近年うすくなっている。減産の傾向をたどるということは、集散地の産地への足が遠くことにつながり、やがては産地的性格を失うおそれがある。この対策としては、産地が一丸となって生産形態や流通機構の改善、育成をはかり、伊勢崎の持つ織り物の特色を強く生かしてゆくことが大切である。

参 考 文 献

- 日下部高明（1972年）足利市における工業の変質、地理学評論 45の4
- 内藤 博夫（1971年）関東地方の織物業 地理 16の2
- 全国繊維工業技術協会 日本繊維加工業
- 伊勢崎市 伊勢崎市制 10年誌
30年誌
- 伊勢崎市 総合調査資料